昭和 36 年のことだったと思う。講談社から「月刊少年クラブ」に代って「少年マガジン」という週刊誌が出るようになった頃、その編集者から、漢字学習のページを設けたいのでその欄を引受けてくれないか、という話があった。

私は幼･少年時代、講談社の「幼年倶楽部」や「少年倶楽部」で育ったものだから、喜んで引受けた。マガジンには“巨人軍物語”という連載物があった。それで、この物語の中にくり返して出てくる漢字を解字し、その解字した漢字は、本文ではふりがなをしないで使う、もしもそれで読めなかったら、「解字を読みなさい。そうすれば意味がよく解って、漢字力が自然につきますよ」という訳である。

これは、一応半年ということで始めたが、なかなか好評で約一年くらい続いたように思う。その時、この解字をこのまま捨ててしまうのは惜しい。これをベースにして一冊にまとめられないか」という話に発展した。

この昭和 36 年という年は、石井方式の第三次実験の二年めである。初めての著作『私の漢字教室』を刊行し、引続く実験のために教材の準備、調査の整理などで多忙を極めていた。だから、週刊誌のための連載記事を続ける苦労は大変なもので、就寝はいつも夜半を過ぎた。

それで、「少年マガジン」の仕事を終えて、ホッとする間もなく単行本の著述にかかったものだから、とうとう胃潰瘍にかかってしまった。長時間坐ったままで胃を圧迫し続けて、その上根をつめて書くのだから無理もない。

昭和 37 年の暮、やっと草稿を仕上げたと思ったら、途端に食べ物が胃に納まらなくなってしまった。食欲がないのに無理して食べるのだが、直に吐いてしまうのである。

診察を受けると、胃の入り口に潰瘍が出来ていて、そのために食べ物が納まらないのであるという。手術をする以外に手がない、というので早速入院し、手術を受けた。

十二指腸にも潰瘍があったということで、胃はほとんど袋にならぬくらい切り取られてしまった。そのため、しばらくは一度にいく口も食べ

ることが出来ず、苦しい日々が続いた。手術後一週間くらいで退院したが、病院にいる間からゲラが病床に届けられ、校正の朱筆を入れたものである。手術には一応死を覚悟していたから、ゲラを手にした時の嬉しさは今でも忘れられない。

こうして昭和 28 年 3 月、刊行されたのが『一年生でも新聞が読める』である。大阪の小路幼稚園園長井上文克先生がこの本を読んで感激し、これを幼稚園教育に移し入れることにより、石井方式は一大転換することになるが、そのきっかけになったということでも忘れがたい本である。

昭和 43 年、幼稚園で漢字教育が始められて間もない頃、ソニーの井深大社長によって幼児開発協会が設立され、鈴木鎮一先生のバイオリンと共に、石井方式の漢字教育がその中心に置かれることになった。

幼児開発協会の設立は、世の中に幼児の才能開発の気運を大いに促すことになった。それで、講談社から、新たに才能開発をうたった本を書いてほしいという依頼を受け、昭和 45 年 10 月刊行したのが『漢字による才能開発』(副題が「三歳からの漢字教育」)である。

第2巻Iは『一年生でも新聞が読める』から解字の部分を抜いたもの、IIは同じく『漢字による才能開発』から解字の章を省いたものである。なお、解字に関しては第 5 巻を参照。IIIは国諸問題協議会の講演速記録、「教育新聞」に連載した教育論、「月刊カレント」に掲載した教育論等を所収したものである。

石井 勲